

資 料

小児看護学における DX 技術を活用した シミュレーション演習プログラムの検討

Study on simulation exercise program using DX technology in pediatric nursing

下道知世乃

Chiyo Shimomichi

橋本美穂

Miho Hashimoto

佐藤朝美

Tomomi Sato

キーワード：小児看護学、小児看護技術、キャリア形成、DX 技術、プログラム評価

Key Words：Pediatric nursing education, Pediatric nursing skills, Career development, Digital Transformation, Program Evaluation

要旨

【目的】小児看護学実習では経験できなかった小児看護技術「輸液管理」「喀痰吸引」「経管栄養法」の習得を中心にシミュレーション教育プログラムを設定した。本稿では、その実践を学生評価から振り返り、今後のシミュレーション教育の課題を明確化することを目的とした。

【方法】本プログラム1週間前、実施後3日以内に「小児看護における基本的実践力に関する自己評価」、プログラム後に「DX 技術を活用したシミュレーション演習プログラムの評価」を実施し、回答は「非常にそう思う・そう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない・全くそう思わない」の6段階リッカート法とし、評価が高い方を「非常にそう思う」とした。

【結果】小児看護における基本的実践力について、プログラム実施前に「あまりそう思わない」「全く思わない」と回答している学生は、質問項目毎に9名中2～6名（38%）であったが、実施後は0名（0%）だった。実施後の演習プログラムの評価では、「リアリティのあるトレーニングができた」で「そう思う」と回答した学生は9名中7名いた。

【考察】学生の自己評価による学習目標の達成度からは一定の成果につながったといえる。今後さらにプログラムを発展させていくために、小児看護のキャリア形成における学内演習シミュレーションの成果が卒後の看護実践にどのように影響を与えているのかを評価していく必要がある。

Abstract

Purpose: To review the content of simulation exercises based on student evaluations, and to identify issues for future simulation education in pediatric nursing.

Methods: A self-evaluation of basic practical skills in pediatric nursing was conducted 1 week before and within 3 days after the program. Furthermore, the simulation exercise program utilizing DX technology was evaluated after

Received : October. 31, 2023

Accepted : January. 22, 2024

横浜市立大学医学部看護学科

Yokohama City University, School of Medicine Nursing Course

E-mail : simomiti@yokohama-cu.ac.jp

E-mail : sato0515@yokohama-cu.ac.jp

the program. Responses were provided on a 6-point Likert scale: "totally agree," "agree," "somewhat agree," "somewhat disagree," "disagree," and "totally disagree."

Results : Regarding the basic practical skills in pediatric nursing, two to six out of nine students (38%) answered "somewhat disagree," "disagree," or "totally disagree" for each question before the program, but no student provided these responses after the program. In the post-implementation evaluation of the exercise program, two to seven out of nine students responded with "agree" for the item "the training was realistic."

Discussion: Self-evaluation of the students in this program suggested that the learning goals were achieved. In the future, it will be necessary to evaluate how the results of the simulation exercise in career development of pediatric nursing affects postgraduate nursing practice to improve the quality of the program.

I. 緒言

新人看護師の離職率は、2021年に10.3%（前年度比+2ポイント）となり、初めて10%を超えた（日本看護協会, 2023）。また、新人看護師の退職理由として、臨床で求められる実践能力と看護基礎教育の乖離があり（厚生労働省, 2011a, 2014）、その内容は、多重課題・想定外のケアなど複雑な状況への対応困難（本田, 横山, 中島, 2022）、リアリティショックが指摘されている（内野, 島田, 2015）。本学は看護学実習をコロナ感染拡大の状況下でも臨地で実施できたが、患者のニーズの把握、看護ケアの計画、実践、評価の看護プロセスに関する経験の短縮、小児看護技術を経験する機会の減少に見舞われ、臨床現場と教育の乖離が課題となった。

特に小児看護学実習履修学生（以下、学生）は、子どもと関わる経験が少なく、発達段階における子ども像をイメージしにくいことから実習では対応の難しさを経験する。例えば、バイタルサイン測定では、発達段階毎に異なるバイタルサインの解釈や手法の変更、（Lambton, 2008）、体調不良で不機嫌になる子どもや親への配慮を踏まえた小児看護特有の関係性の構築技術など、子どもと家族の複合的な状況を理解した上での実践が求められるため、小児看護技術は学生にとって習得が難しい。

近年、このような課題解決に向け、リアルな体験として学習可能なDX（Digital Transformation、以下DXとする）を導入した実習報告がなされている（吉沢, 2021）。その一つであるシミュレーション教育は、学習者の主体的学びを可能とし、理論と実践をつなぎ、知識・技術・態度を統合する経験的学習の教授法として注目され、看護実践力の育成に向けてその必要性が指摘されている（Dreifuerest, 2009；厚生労働省, 2011b）。また、先述した多重課題と実践をつなぐ学習としても推奨され（Felton et al., 2013；松沢, 白木, 津田, 2017）学習者が経験している学習の分断化の問題を解決可能（Benner, 2010/2011）なことから、小児看護実践に活かせる教育方法であると考えた。

そこで、本学では小児看護の分野で看護職として就業あるいは研究・教育などに関わることを希望する学生を

中心に、小児看護実践への不安を軽減し自信を持ちキャリアに方向性を持てるよう、全ての臨床実習終了後に、小児看護学実習では経験できなかった代表的な小児看護実践と技術である「輸液管理」「喀痰吸引」「経管栄養法」の習得を目的とした「DX技術を活用したシミュレーション演習（以下：本プログラム）」を設定した。演習では、小児看護学の知識や技術を統合することを目的としたシミュレーション教材として、発達段階を踏まえた子どもの思考、行動、家族像を想定した学習シナリオを準備した。さらに、学習者が主体的に思考し、行動を振り返る事から気づくためのディブリーフィングを設定した。

本稿では、本プログラムの計画について、学生評価をもとに今後の課題を明確化することを目的とする。なお、本報告における「DX技術を活用したシミュレーション演習」とは、小児高機能シミュレーター SimBaby[®]（シムベビー）、タブレット端末、大画面モニターを活用し小児看護の知識と技術を統合することを目的としたプログラムをさす。

II. DX 技術を活用したシミュレーション演習プログラムの概要

1. 本プログラムに参加した学生の学習背景

小児看護学では、小児看護学概論（2年次）・小児病態治療学（2年次）・小児看護方法論（3年次）・小児看護学実習（4年次）を通じて、子どもの成長・発達と健康増進に必要な看護の知識を学ぶ。さらに、全領域別実習終了後に実施する看護の統合と実践Ⅲ（統合実習）では、学生が個々に関心ある実践上の課題に焦点を当て、実践の場で自主的・主体的な看護実践活動により課題を追求し、看護および看護学の特質について考察し一部を卒業論文として纏める。本プログラムは、この統合実習に位置づけられ、小児看護学実習で体験できなかった看護実践における知識や技術の統合を自己課題として意識化し、主体的にキャリア構築する力を養えるように計画・実施した。

2. 小児看護学における DX 技術を活用したシミュレーション演習プログラムの計画（表1）

本プログラムは、学生が小児看護学実習では体験でき

なかった小児看護技術とした、以下2つの演習を計画した。

演習①として「輸液管理」「喀痰吸引」「経管栄養法」について、学生が技術の習得目標を達成できるまで技術練習を行った。

演習②「気管支喘息のある小児の看護過程の展開」では、小児高機能シミュレーターを使用し、9か月の小児の事例に関する情報を収集し、看護計画の立案、実施ができるプログラムを作成した。シミュレーターのバイタルサインと呼吸状態の設定は、「入院時」「適切なケア実施後」「不適切なケア実施後」の3パターンをSimBaby[®]に設定し、学生が実施したケア内容の適切性に合わせSimBaby[®]が反応するようにセッティングした。学生の実践・評価としては、ディブリーフィングを「情報収集」「アセスメント・看護計画立案」「実施」「報告」毎に行い、実践プロセスや結果から、不足する情報や実施内容を学生間でディスカッションし、よりよい方法を検討した。

3. DX 技術を活用したシミュレーション演習プログラムの評価

本プログラムの評価は、小児看護における基本的実践力に関する自己評価となるように、「看護学教育モデル・

コア・カリキュラム」の「看護実践の基本となる専門基礎知識」にある「小児期にある人々に対する看護実践」の学修目標を参考に作成した。事前評価として自己評価と未経験課題、事後評価として自己評価とプログラム評価を行った。評価は、Microsoft Forms を用いて、プログラム前（1週間前～前日まで）とプログラム後（3日以内）にオンラインにて回答を求めた。学生には、プログラム前後に小児看護における基本的実践力を比較するため、Forms による評価は自己の課題を明確にして課題に沿った実践設定と評価の実施を目的とすることを説明した。回答は「非常にそう思う・そう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない・全くそう思わない」の6段階リッカート法で行い、評価が高い方を「非常にそう思う」とした。実施期間は2023年10月5日～2023年10月15日までとした。

4. 倫理的配慮

本プログラム前後の自己評価は、プログラムの評価に用いること、回答は自由意思であること、成績・評価に影響しないこと、プログラム評価を行わなくてもプログラムには参加できること、個人情報の保護を徹底すること、結

表1 DX 技術を活用したシミュレーション演習の概要

プログラム目標	
点滴管理、栄養管理（胃管）、吸引の基本的技術を理解し、実施することができる 患者の呼吸状態のアセスメントをするために、必要な情報をご家族や子どもから得ることができる 子どもの呼吸状態をアセスメントし、援助を考察することができる	
技術演習 実施内容	
演習	鼻腔吸引 <ul style="list-style-type: none"> 小児高機能シミュレーターSimBaby[®]を使用し、呼吸音の正常・異常を判断する 小児高機能シミュレーターSimBaby[®]を使用し、吸引を実施する 吸引時の子どもへの説明について、ディスカッションする
	経管栄養管理 <ul style="list-style-type: none"> 小児医療的ケアモデル人形「まあちゃん」を使用し、経管栄養チューブを挿入し、チューブの位置を確認する 挿入した経管栄養チューブを固定する 小児医療的ケアモデル人形「まあちゃん」を使用し、子どもの体位を整え、経管栄養剤を投与する 経管栄養中の観察について、ディスカッションする
	① 点滴管理 <ul style="list-style-type: none"> ポンプ使用による注意点を理解したうえで、輸液ポンプ・輸注ポンプを操作する 自然滴下による点滴速度を計算し、滴下調整する 輸液をしているモデル人形を使用した移乗の練習を行う 輸液中の子どもの看護について、ディスカッションする
シミュレーション シナリオ	
<p>現病歴：3日前から咳嗽をしていた。10/11 夕食（離乳食）は、咳きこんで嘔吐してしまい、いつもの半分も食べられなかったため、ミルクを150ml飲ませた。就寝時もぐずり、1時間ほどおんぶをしてから寝かせた。10/12 朝食は摂取できず、ミルクも100ml飲むとやめてしまう。小児科外来を受診すると気管支喘息発作の診断ため、入院となった。</p> <p>あなた（学生）は、外来看護師から申し送りを受け、入院となった横浜ソウタ君の担当になった。入院後、初回の訪室であり、ソウタ君の呼吸状態をアセスメントし、ソウタ君と母親に必要な看護援助を2人1組で実施する。不足している情報は、母親からリーダー看護師（教員）に確認し、収集し、リーダー看護師に、ソウタ君の呼吸状態を報告する。</p>	
シミュレーションシナリオ 実施内容	
演習	情報収集 <ul style="list-style-type: none"> 教員から提示された喘息発作による入院事例に対し、必要な情報を整理する SimBaby[®]から、呼吸に関する情報収集する 父親役である大学院生（TA）に対し問診を行い、必要な情報を収集する 検討した優先順位、手技を用いて、不足する情報を収集する 実施後、ディブリーフィングを行い、不足情報、優先順位、バイタルサイン測定の手順について検討する
	② アセスメント / 計画立案 <ul style="list-style-type: none"> 収集した情報から呼吸状態についてアセスメントを行う 呼吸を安楽にするための援助を計画する
	実施、評価 <ul style="list-style-type: none"> 実施者は計画した援助を実施し、援助後の呼吸状態を評価する 実施後、ディブリーフィングを行い、援助内容、説明内容、優先順位について検討する 検討した援助内容を再実施し、呼吸状態を評価する
報告 <ul style="list-style-type: none"> SBAR[*]を用いた報告について、ディスカッションする 担当看護師としてリーダに入院患者の情報を報告・共有する 	

* Situation（状況）、Background（背景）、Assessment（アセスメント）、Recommendation（提案）の略

果の公表について、文書と口頭にて説明を行い実施した。

Ⅲ. 結果

1. 参加者

統合実習開始2か月前に学生にプログラムについて告知し、参加希望者を募集した。10名の参加者のうち、小児看護における基本的実践力に関する自己評価について、9名の学生から回答を得た（回答率90%）。

2. 評価結果

1) 小児看護における基本的実践力（表2）

小児看護における基本的実践力について、プログラム実施前に「あまりそう思わない」「全く思わない」と回答している参加者は、11項目の中で総数37名（約38%）であったが、実施後は0名（0%）であった。プログラム実施前の自己評価が特に低かった項目は「様々な病期・症状・治療に応じた子ども（医療的ケア児を含む）の特徴を理解し、必要な看護を説明できる」であり、6名（約66%）の参加者が「あまりそう思わない」「全く思わない」と回答した。小児看護における基本的実践力につい

て、プログラム実施前に、「非常にそう思う」「そう思う」と答えた学生の総数は、0～4名（約20%）であったが、実施後には3～8名（約56%）に増えた。プログラム後、自己評価が特に高かった項目は「子どもの権利擁護の重要性を理解し、看護を実践できる」、「発達段階によって生じやすい小児期特有の健康問題の特徴と必要な看護について説明できる」であり、8名（約88%）の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。

2) シミュレーション演習プログラムの評価（表3）

(1) 小児看護学で未経験の技術習得・知識の定着

事前の学生評価における未経験の技術は、「吸引」「輸液ポンプの操作」「経管栄養」であった。また、小児看護の知識に関する課題は、「講義で学んだ基本的な知識がインプットされたままになっている」と回答した。事後評価における解決できた技術課題は、「点滴や吸引、経管栄養時の手順や注意点」、「呼吸音の正常・異常の聞き分け」であった。また、小児看護技術の習得だけでなく「吸引と経管栄養は子どもにとって苦痛な処置であり、いかに素早く、正確に実施できるかを考えながら取り組んだ」と回答があった。

表2 プログラム前後の小児看護における基本的実践力

(N=9)

NO.	質問項目	非常に そう思う		やや そう思う		あまり そう 思わない		全く そう 思わない		非常にそう思う ～そう思う 人（%）		そう思わない～ 全くそう思わない 人（%）	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
1	子どもの権利擁護の重要性を理解し、看護を実践できる	前	後	3	5	4	1	1	3	3(33%)	8(88%)	2	0
2	子どもに特有な看護技術を理解し、対象者に適した方法で実践することについて説明できる	前	後	1	2	4	3	1	1	1(11%)	4(44%)	4	0
3	発達段階によって生じやすい小児期特有の健康問題の特徴と必要な看護について説明できる	前	後	4	6	3	2	2	4	4(44%)	8(88%)	2	0
4	病気や入院生活が子どもに及ぼす影響を理解し、苦痛の緩和、安全・安楽の保持を基本とする看護を説明できる	前	後	2	1	4	2	1	2	2(22%)	5(55%)	3	0
5	虐待等、特別な状況にある子どもや家族、社会の特徴を理解し、必要な看護を理解できる	前	後	3	3	3	2	1	3	3(33%)	4(44%)	3	0
6	様々な病期・症状・治療に応じた子ども（医療的ケア児を含む）の特徴を理解し、必要な看護を説明できる	前	後	3	1	4	2	2	1	1(11%)	3(33%)	6	0
7	成長・発達段階に適した看護実践の方法を見いだすとともに、セルフケア獲得等の成長・発達そのものを家族とともに支える看護を実践できる	前	後	6	4	2	1	0	5	0	5(55%)	3	0
8	子どもの成長・発達に関してアセスメントできる	前	後	1	5	6	1	1	1	1(11%)	5(55%)	2	0
9	子どもの病気や入院生活が家族に及ぼす影響を理解し、病状や発達段階、家族の特性に応じて家族全体への看護を説明できる	前	後	1	4	4	2	2	1	1(11%)	4(44%)	4	0
10	子どもの成長・発達と健康上の課題を統合するとともに、病院や家庭、学校等の場に応じた対象者のニーズを捉えて看護を説明できる	前	後	2	5	3	1	1	2	2(22%)	5(55%)	4	0
11	成人移行期における治療継続や自分らしい生活の実現のための看護を説明できる	前	後	3	4	2	3	1	3	3(33%)	4(44%)	4	0
総数		前	後	20	44	42	25	12	20	20(20%)	55(56%)	37	0

表3 DX 技術を活用したシミュレーション演習の評価

(N=9)

NO.	質問項目	非常に そう思う		やや そう思う		あまりそう 思わない		そう 思わない		全くそう 思わない		非常にそう思う～ そう思う 人（%）	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
1	小児シミュレーション研修を行って、情報収集の練習になりましたか	前	後	5	3	1	0	0	0	0	0	8	8(89%)
2	小児シミュレーション研修を行って、看護師としての自分の不足しているスキルが明確になりましたか	前	後	4	4	1	0	0	0	0	0	8	8(89%)
3	小児シミュレーション研修を行って、看護師としての自分の短所が明確になりましたか	前	後	3	5	1	0	0	0	0	0	8	8(89%)
4	小児シミュレーション研修を行って、関わりの意図を考えられるようになったと感じますか	前	後	3	4	2	0	0	0	0	0	7	7(78%)
5	研修によって、小児看護における技術の課題は解決しましたか	前	後	2	5	2	0	0	0	0	0	7	7(78%)
6	小児シミュレーション研修を行って、これまでの学習（概論・方法論・演習）と関連付けができましたか	前	後	2	5	2	0	0	0	0	0	7	7(78%)
7	リアリティのあるトレーニングはできましたか	前	後	1	6	2	0	0	0	0	0	7	7(78%)
8	研修によって小児看護における知識の課題は解決しましたか	前	後	0	7	2	0	0	0	0	0	7	7(78%)
9	実習目的は一部達成できましたか	前	後	2	4	3	0	0	0	0	0	6	6(67%)
10	小児シミュレーション研修を行って、想定した状況にある患者のイメージができましたか	前	後	1	5	3	0	0	0	0	0	6	6(67%)
11	小児シミュレーション研修を行って、必要かつ適切なアセスメントはできましたか	前	後	1	5	3	0	0	0	0	0	6	6(67%)
12	小児シミュレーション研修を行って、コミュニケーション方法の練習はできましたか	前	後	1	3	5	0	0	0	0	0	4	4(44%)
13	小児シミュレーション研修を行って、看護師としての自分の長所が明確になりましたか	前	後	0	3	2	4	0	0	0	0	3	3(33%)

(2) 小児の年齢・発達段階に応じた手技・技術の習得

事前の学生評価における小児看護の知識に関する課題は「発達に応じたバイタルサインの正常値」であり、技術の課題は「年齢と発達に応じた正しいバイタルサイン測定」であった。事後評価における、知識の課題、技術の課題が解決したかの問いに「とてもそう思う」から「そう思う」と回答した学生は7名であった。本プログラムの総合評価では、「リアリティのあるトレーニングができた」で「そう思う」と回答した学生は7名(78%)いた。

(3) 小児看護の知識と技術の統合

事前の学生評価では、「知識をもとに実践に繋げる力が特に不足している」、「知識がキーワードで頭に浮いている状態でつながっていない」との回答があった。事後評価では「今回の演習では、実際にケアをしながらアセスメントをするので知識をアウトプットしやすく、どのような知識が足りないのか理解できた」、「情報収集の場面で、どんな情報を何のために収集するのかを考えることが重要だと思った。今回の演習で明確になった不足知識は復習し、自分のものになりたい」との回答があった。また、「本プログラムを行って、これまでの学習(概論・方法論・演習)と関連付けられたか」の問いに「非常にそう思う」から「そう思う」と回答した学生は7名(78%)いた。

(4) 小児の病状に対する適切なアセスメント力

事前の学生評価では、知識について「成長発達、バイタルサイン、小児特有の症状の特徴」を課題にあげており、個人目標として「子どもの状態をアセスメントする力を養う」、「成長別に全身状態のアセスメントを行う」と回答があった。事後評価では「本プログラムを行って、必要かつ適切なアセスメントはできたか」の問いに、「非常にそう思う」から「そう思う」と回答した学生は7名(78%)いた。

VI. 考察

1. 本プログラム計画における学生評価

小児看護の基本は、子どもの権利を尊重した看護を実践することである。本プログラムは、自分の思いを言葉で表現することが難しい気管支喘息の乳児を設定した。実施後の自己評価が高かった項目は「子どもの権利擁護の重要性を理解し、看護を実践できる」であった。岡崎ら(2022)は、学びを経験だけの記述ではなく、子どもの看護に関する考えや気づきが、人権を守ることに繋がっていることを明らかにしている。本プログラムにおいて、学生はベッドサイドで情報収集を行い、ディブリーフィングで自分自身の行動を裏付ける知識・技術をホワイトボードに記載した。このことによって、学生同士で確認し合う機会が子どもの発達段階を捉え、子どもの最善の利益を尊重する看護の重要性を認識につながったと考える。

Benner, et. al (2010/2011) は、看護師になるということ、形成という言葉で説明している。形成とは、単なる学習という方法で社会化されていくというより、意義、内容、意図、看護実践によって組成されるものであると述べている。参加者は、「足りていないのかなども理解できた」「考えることも大事」と表現している。このことから、参加者が小児看護の知識・技術の学習のみにとどまらず、本プログラムを実施した経験がアセスメントの言語化を促し、臨地実習で求められてきた根拠や発達段階における個別性や新たな視点に気づき、自分の能力を高めることに繋がったと考える。

2. 小児看護における本プログラムの特徴

本プログラムは、参加者が未経験であった3つの小児看護技術とシミュレーションを取り入れた「気管支喘息のある乳児の看護過程の展開」を実施した。実施後は、「リアリティのあるトレーニングができた」で「そう思う」と回答した学生は7名(78%)であった。実習での未経験の技術が、リアリティショックをもたらす要因の一つである(佐居ら, 2021)ことから、学生が未経験の小児看護技術を演習に取り入れる本プログラムは、臨床場面で子どもへのケアを行う際に課題であるリアリティショックの解決に貢献できると考える。

新人看護師が一人で発達途上にある乳児から主観的情報、客観的情報を得てアセスメントし判断することは難しい(厚生労働省, 2011b)。本プログラムでは、2人1組でトレーニングを行うことを前提とした。フィードバックとディブリーフィングを行いながら2組目、3組目の参加者が実施し、気管支喘息の重症度、呼吸状態の緊急性を判断、客観的情報を把握し、必要な看護を行うことが求められた。小児の病状に対する適切なアセスメント力の評価では、実施前「子どもの状態をアセスメントする力をつける」という課題をもち、実施後「必要かつ適切なアセスメントはできたか」の問いに、「非常にそう思う」から「そう思う」と回答した学生は7名(78%)であった。このことから、学生同士が考えて、実践し、振り返るというシミュレーションの経験を通して、「足りていない」課題を達成できること、また言語で表現することが難しい発達段階にある乳児のフィジカルアセスメント能力を促進する小児看護の要素を取り入れたプログラム構成が特徴と考える。

3. 本研究の限界と課題

本プログラムは、参加者の人数が少ないという限界がある。今後の課題は、領域横断的に対象者を増やして検証していくことが必要である。また、すべての実習を終えた4年生が学びを統合していく時期に、学内演習シミュレーションの成果が、卒後の看護実践にどのように影響を与えているのかを評価し、小児看護のキャリアを形成にむけた演習を検討していく必要がある。

V. 結論

本研究の目的は、本プログラムの計画について学生評価から振り返り、今後の課題を明確化することである。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 本プログラムの計画は、学習目標の達成度から統合実習における小児看護のシミュレーション教育の位置づけとなった。
2. 学生が未経験の小児看護技術を明確化し演習に取り入れる本プログラムは、臨床場面で子どもへのケアを行う際に課題であるリアリティショックの解決に貢献できる。
3. 今後の課題として、小児看護にキャリアを置く対象者を領域横断的に増やし、シミュレーションの成果を検証していく必要がある。

倫理審査機関名と承認番号

なし

付 記（学位論文や学会発表の一部など）

なし

謝 辞

なし

利益相反の有無

利益相反はありません。

著者資格

下道知世乃：プログラム、評価アンケートを作成し、プログラムの実施、評価アンケートの集計を行った。

橋本美穂：プログラムの実施、評価アンケートの分析を行った。

佐藤朝美：責任著者であり、プログラム、評価アンケートにおける全体への助言、監督を行った。

すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

文 献

- Benner, P., Sutphen, M., Leonard, V., Day, L. (2011). 看護教育への新たなアプローチ, 早野 ZITO 真佐子 (訳), ベナール ナースを育てる. 第1版 (128) 東京:医学書院.
- Dreifuerst K. T. (2009). The essentials of debriefing in simulation learning: a concept analysis. Nursing education perspectives, 30 (2), 109-114.
- Felton, A., Holliday, L., Ritchie, D., Langmack, G., & Conquer, A. (2013). Simulation: a shared learning experience for child and mental health pre-registration nursing students. Nurse education in practice, 13 (6),

536-540.

本田真也, 横山利枝, 中島登美子 (2022). 看護学生が多重課題の優先度を判断する小児看護演習プログラムの開発と検討. 関西医科大学研究紀要, 23, 221-233.

厚生労働省 (2011a): 新人看護職員研修ガイドライン. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000128o8-att/2r985200000128vp.pdf> (2023 年 9 月 1 日閲覧)

厚生労働省 (2011b): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, Retrieved from: <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000013l6y.html> (2023 年 10 月 1 日検索).

厚生労働省 (2017): キャリア教育の実践・大学におけるキャリア教育の内容と課題. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11800000-Shokugyounouryokukai-hatsukyoku/0000090850.pdf> (2023 年 10 月 26 日検索)

厚生労働省 (2014): 新人看護職員研修ガイドライン【改訂版】. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf (2023 年 9 月 1 日閲覧)

Lambton J., Pauly-O'Neill S., Dudum T. (2008). Simulation as a Strategy to Teach Clinical Pediatrics Within a Nursing Curriculum, Clinical Simulation in Nursing, 4 (3), e79-87.

松沢明美, 白木裕子, 津田茂子 (2017). 看護基礎教育課程における小児看護学シミュレーション教育の課題: 文献レビュー. 日本看護科学会誌, 37, 390-398.

日本看護協会 (2023): 2022 年病院看護実態調査: https://www.nurse.or.jp/home/assets/20230301_n104.pdf. (2023 年 10 月 29 日参照)

岡崎草代夏, 武田美奈子, 東海林美幸, 鹿野ひとみ (2022). 小児看護学実習におけるシミュレーション教育を取り入れた学内演習での学生の学びと今後の課題研究紀要青葉, 13 (2), 5-68.

Page-Cutrrara K. (2014). Use of prebriefing in nursing simulation: a literature review. The Journal of nursing education, 53 (3), 136-141.

内野恵子, 島田涼子 (2015). 本邦における新人看護師の離職についての文献研究. 心身健康科学, 11 (1), 18-23.

吉沢豊子 (2021): Society5.0 時代の看護学教育の DX とは. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/society5.0-yosizawa.pdf> (2023 年 12 月 26 日検索)